

教科融合に寄与する学習言語カリキュラムの開発

－教科学習に必要な言語に注目して－

深澤 清治（英語教育学講座）

要約

従来の学校教育における教科の枠組みを越えて、大学院レベルで協働的に課題解決を図ろうとする試みが始まった。教科融合は単一の教科教育に新たな視点を取り込むアプローチであるが、その内容をどこから選定し、組み合わせるか、言わば内容中心のカリキュラム編成と言える。しかしながら、これらの内容を伝えるための文脈を与えるものは言語であり、言語の持つ形式的、認知的、社会文化的側面は各教科独自のものが存在する。そこで以下では、内容中心カリキュラムと相対する、学習言語カリキュラムの特徴から、教科融合の可能性を探ってみたい。

I 教科融合のめざすもの

教科カリキュラムは、それぞれの学問体系を重んじて、独立した教科で編成するよく組織化・体系化されたカリキュラムであり、また学校においては子どもたちがそれぞれの学年レベルにおいて課された知識や技能を系統的に学習することができるように単純化されている。しかし、これらのカリキュラムはともすれば学習者の生活体験から乖離しているため、社会生活における課題解決に役立たないという欠点も指摘されている。

これに対して、各々の独立した教科の存在を認め、従来の教科区分を基盤としながらも、2つ以上の教科を必要に応じて関連させて教授しようとするのが教科融合カリキュラムである。たとえば、「歴史、地理、公民」を統合して社会科にしたり、「理科と数学」をまとめて理数科にしたりして、同一分野の教科を結合したり、教科間の内容の関連を図ろうとするものである。また、複合的な取り組みから、子どもたちの現実の社会生活から単元を取り上げ、言わば教科の生活化をめざして主体的かつ対話的な学びを引き出す可能性も期待されている。このような教科を横断する融合的学びは、研究分野がさらに抽象化、分化する大学院での学びであっても同じような効果があるものと考えられる。

従来の学校教育における教科の枠組みを越える新たな試みの一つとして、CLIL（内容・言語統合教授法）が注目を集めている。カナダにおけるイマージョン教育に端を発するCBI（内容重視の教授法）が内容を重視して言語の習得を目指すのに対して、CLILは外国語を使って特定の教科内容と言語の同時習得を目指す教科教育とされている。CBIもCLILも単一の教科教育に新たな視点を取り込むアプローチであるが、その使用内容をどこから選定し、組み合わせるか、言わば内容中心のカリキュラム編成と言える。しかしながら、これらの内容を伝えるものは言語であり、言語の持つ形式的、認知的、社会文化的側面は各教科独自のものが存在する。そこで以下では、内容中心カリキュラムと相対する、学習言語カリキュラムの特徴から、教科融合の可能性を探ってみたい。

Ⅱ 学習言語カリキュラム

1. 学習言語とは

日常生活におけることばと、学校教育場面におけることばには語彙や文法、表現において異なる場合がある。学校での学習場面で、語彙、文法、表現、さらには談話（文や段落間のつながり）構造において、特徴的な言語使用があるとされており、このような授業や学習場面で使用される言語を「学習言語」などと呼んだりする（バトラー後藤、2011, p. 4）。それによれば、たとえば、「比べる」と「比較する」は授業の中では頻出語であるが、子どもの理解する「比べる」という行為と、教師が意図している「比べる」という行為が必ずしも一致していないと思われる場面があるという。授業で「比べる」時は、相違点と共通点の双方を検討する作業をさすことが多い。一方、日常生活での「比べる」行為は、相違点に注意が向いていることが多い。同様に「比較する」と解釈される英単語の *compare* と *contrast* にも類似点、相違点いずれに焦点を当てるかに違いがあるとされている。

このほかにも、教科間で同じ漢字の使い方が異なる例がある。たとえば「和」という文字には、算数・数学での 2 つ以上の数・式などを加えて得た値の意味、「平和」に込められた社会科での意味、また「洋」に対する「和食」のような国語科、家庭科での意味がある。さらには、「動き」は、理科では「てこの動き」といったように、物理的なモノの移動を意味することが多いが、社会では「世界の動き」など、状態や傾向が移り変わる意で使われたりする。同様に、国語で出てくる「能で使うお面」の「面」は、社会の「情報技術の発展における良い面と悪い面」の「面」と同じでないし、理科の「葉の表面に現れた水滴」の「面」とも違ふし、数学の「球の面」の「面」とも違ふ。父親が子どもに「面と向かった口答えするな！」といった場合の「面」とも違ふため、なかなか複雑である（バトラー後藤、2011）。このことから、教科学習においては各教科独自のそれぞれ異なる意味を文脈に応じて理解・表現できることが教科の学習能力に大きな影響を与え得るであろう。ここで教科言語を教科横断的に再編成する試みを、バトラー後藤(2011)を援用して「学習言語カリキュラム」と名付けると、教科を融合しようとする試みは、教科内容と教科言語をそれぞれタテ糸、ヨコ糸にしなから、学習に寄与することができるであろう。

2. 学習言語の習得のために

各科教科書においても、上級学年に進むほど教科に特化した専門語が多くなる。教科学習の成功は、このような専門語をいかに多く、しっかりと理解し、文脈に合わせて正確に運用できるがどうかにかかっていると言えよう。なぜなら、教科の専門語は、それぞれの教科学習場面での理解・運用に関わる言語使用を特徴づける中心要素だからである。教科間だけでなく、日常生活と学習場面での意味が異なる語彙も多く、これらは教科学習の中でしっかりと習得されなければならない。

教科学習において学習者が遭遇する単語は主に 3 種類に分類されることが多いとして、バトラー後藤(2011)は次ページのような表にまとめている(p. 67)。これによれば、「学習語」とは、教科書など学習場面で出てくる語であり、分野によって日常生活とは違う意味で特化して使われたり、特化しないで使われたりする語のことをいう。また、それらは往々にして母語に見られることから明示的に指導されたり定義されたりすることが少ないので、学習者にとっては時として厄介な存在である。

表1 教科学習で使われる語彙

語彙のタイプ	意味範囲	使用範囲	例（英語）	例（日本語）
一般語 (General words)	特化しない	分野を超えて使用される	already, busy	学校、起きる
専門語 (Technical words)	特化する	分野限定	fulcrum, pivot	光合成、電磁波
学習語 (Academic words)	特化する場合もしない場合もある	分野を超えて使用される	assert, research	比較、分析

Ⅲ 社会のグローバル化に対応する教科学習のために

これまで、教科学習において必要な学習言語の習得の優劣が、学習の到達度に影響を与える可能性を指摘してきた。対話型のコミュニケーション能力の必要性が指摘される中、教科書をはじめとする文字言語における読解、表現などにおいても教科独自の、あるいは教科に共通する学習言語の習得は必須となってくるであろう。近年、新聞や書籍などで難解な漢字や表現を避ける傾向があり、そのことが専門語や学習語のインプット量をますます低下させてしまう可能性もある。

このような学習言語の必要性は、日本語を母語とする子どもたちだけの問題ではない。社会のグローバル化によって、国内に住む外国人、いわゆる言語マイノリティの数は増大しており、当然、学童期の子ども的人数も地域によっては急激に増加している。すべての子どもたちに社会参画能力を付けるための教科教育では、まず、カミンズのいう基本的対人伝達能力 (Basic Interpersonal Communication Skills, BICS)、のちに会話的言語力と呼ばれる認知的必要度の低い日常会話の能力を付けた後には、学校での教科学習を行うにあたって必要な認知学習言語力(Cognitive Academic Language Proficiency, CALP)が必要となってくるであろう。

ここで将来の教師に必要となってくるのは、目の前の学習者のレベルに応じて、説明言語を難化したり、易化したりできる力、言い換えれば、一般語、専門語、学習語をいかに場面に応じて使い分けることができるか、パラフレイズ能力と呼べる能力であろう。教科内容知識の分化、専門化に至る中で、専門内の共通言語としてのメタ言語を振りかざすだけでなく、それを学習者に効果的に届けるための学習言語カリキュラムの整備は、内容を融合しようとする試みとともに、試す価値が十分にありそうであろう。教科融合は、専門的学術内容の広がりや統合をねらうと同時に、それらを理解しやすくするための学習手段の統合をねらうことを通して、さらに豊かな教科学習をもたらすものであることを期待したい。

参考文献

バトラー後藤裕子(2011)『学習言語とは何かー教科学習に必要な言語能力』三省堂